

最優秀賞

神奈川県教育長賞

同い年になった姉

大井町立湘光中学校

一年 細田 心奈

私には、三歳上で通信制高校に通っている姉がいる。今この課題作文の中では姉と書いているが、生まれてから姉のことを「お姉ちゃん」と呼んだことはない。幼い頃は愛称だったけど、いつの間にか呼び捨てをしていた。

私にとって姉は、不思議な存在だった。年上だけど、私がすんなりできることなどできるようになるまで時間がかかることが多々ある。一番印象に残っているのは、靴紐の蝶々結びだ。母にやり方を教えてもらい、私はすんなりできたけれど、姉はなかなかできなかつた。泣きながら、一時間位かけてできるようになった。私が逆の立場だったら、諦めていたと思う。辛抱強く練習していたことが、すごいと思った。

私が、小学校六年生の夏休みくらいに、母から「○○のことで話がある」と言われ、何の話だろう…と少しドキドキした。母から聞いたのは、『姉が軽度知的障害と診断された』『様々な面での成長が実年齢よりも三歳くらい遅れている』という内容だった。そっか…。三歳ってことは、私と同じ年なんだな…と思った。

軽度知的障害について私はよく分からなかったので調べてみた。日常生活などが普通に見えるので、周囲から気付かれにくい傾向にあり、誤解されてしまい、様々な面で困難を感じてしまうことがあると書いてあった。確かに姉は、見た目は障害があるように感じない。家族とせずと生活しているから、姉の特徴は知っているけれど、初めて会った人や姉のことを知らない人は、きっと接していくうちに誤解をしてしまうと思う。軽度知的障害の一番辛いところは、その「誤解」だそう。

私たちの周りには、見た目でわかる障害を持っている人、見た目ではわからない障害を持っている人がいる。姉のことを知ってから、今まで正直読んでいなかった、学校から配られる福祉のパンフレットを読むようになった。何かの時に助けを必要としている人が身に着けているヘルプマークの存在も知ることができた。知らなかったことを知ることができた。

『知る』ことの大切さを知った。

今回、この作文を書く前に、デリケートなことだから、姉に書いていいかを聞いた。姉はふたつ返事で「いいよ」と言ってくれた。だから、書くことにした。

私が大切だと思うことは、『知る』ということ。そのきっかけは色々なところにある。例えば、

私が今まで読んでいなかったパンフレット。あとは、スマホやパソコンを使って調べてみる。こと。動画では、十代の人が、自分の障害について分かりやすく、発信する人も多い。隠さず発信して理解を広げようとしている。『私はこういう人です』と発信することは勇気がいることだと思うし、素晴らしいことだと思う。

知ることのきっかけは案外身近にあった。そして、気付いていないだけで、私の周りに困難を抱えている人がいるはずだ。その時に、色々なことを知っていて理解できていたら、私にもできる対応があるはずだ。

少し前によく流れていた歌で『見た目に囚われない』という歌詞があった。その通りだと思ふ。人は見た目では分からないことがある。それは、障害があってもなくても一緒だ。その中で、私たちの身の回りで、見た目ではわからない障害を抱えている人がいるのも事実だ。私の姉。苦労していることも多い。けれど、自分にできることを日々頑張っている。普段は呼び捨てだけれど、姉の姿を見てみると、リスペクトを込めて、たまには「お姉ちゃん」と呼んでみるのもいいのかもしれないと思つた。